

## 21世紀の日本のかたち（30）

### 京都・桂離宮 －人間尺度の小宇宙－



戸沼幸市  
〈(財)日本開発構想研究所 理事長〉

#### 桂 再訪

春から初夏に向かう季節の一日、52年ぶりに京都の西郊外、桂川のほとりの桂離宮を訪れる機会をもちました。

52年前、私が早稲田大学建築学科3年の時、奈良と京都の日本古建築を実地見学するという建築学生必須のプログラムがあり、建築史の先生に引率されて、ここ、桂離宮を観て以来のことです。

その時の同級生たちが再び京都に集まって、当時を追体験しようということになりました。

52年前とは昭和32（1957）年で、昭和の桂大修理（昭和51年～平成3年）以前です。遠い日本王朝の面影をもつ竹林に包まれた離宮とは平安朝の遺構であるかのように、いかにも古色蒼然といった印象でした。

それでいて、雁行した書院群が直截な幾何学的造形で「モダン」だという風にも思ったことでした。当時の建築学生としては京都の離宮よりも奈良の東大寺、大仏を包む瓦の大屋根、そして寺々の「まるき柱」のおおらかさにひかれました。

おおてらの まろきはしらの つきかげを  
つちにふみつつ ものをこそおもへ

とは奈良、唐招提寺を訪れ、金堂の列柱を思い浮かべながらうたった會津八一の歌で、今も私の心に残っております。

桂離宮は観光名所であり、これを管理している宮内庁京都事務所にあらかじめ参観を申し込んで許可をもらい、20人ほどのグループごとに時間をずらして、係りの案内のもとにこの回遊式庭園をほぼ1時間で一回りするというものでした。

今回の印象は、昭和の解体修理により書院、茶室など、建築から古色が払われてすっかり新しくなったこと、庭園の木々が大きくなり、森となって桂を包んでいることでした。

#### 身体を包む親和空間

この森への入口が、小さく絞った表門と御幸

門ですが、さりげなく客を迎え入れる心優しさが感じられます。



御幸門  
(宮内庁ホームページより)

桂離宮は別邸とはいえ、人間の住まいであり、どれも身体を包む心地よい寸法、人間尺度—ヒューマンスケールでできているのです。木造和風の日本建築の一原型にちがいありません。

桂の庭園はさほど大きなものではなく（1万2千坪）、桂川から水を引いて池をつくり、この周りに施設群を配置するいわゆる池泉回遊式庭園です。

飛び石伝いに回遊路を15、6歩程も進むと峠に茶屋などがあり、この茶屋からの眺めがひよいと変わるという趣向は楽しいものです。



石の造形

庭園の高低差は水辺からわずか20m程（背丈の10倍余）ですが、視点、視線に対する高さ方向への効きが巧妙に計算され、この庭づくりに仕込まれているのです。



書院遠景

そして春夏秋冬、京都のこの小さな森の生命—木々も花々も、鳥や虫たちも来客を楽しませてくれるにちがいありません。

今回の桂離宮のグループ参観は老若男女、カメラを手にリュックを背負ったりしての軽い洋服姿ですが、かつては日本王朝の和の服で、心ゆくまでのゆったりとした自然観賞であったろうと想像されます。

## 月の桂

桂離宮は17世紀初頭、八条宮初代<sup>としひと</sup>智仁親王（1579年～1629年）によって宮家の別荘として創建されたとのことですが、主殿、古書院が出来上がった時に、智仁親王は「雲は晴れ 霧はきえゆく 四方の岑 中空清く すめる月かな」と歌を残しています。

古書院は、池に対して最も良い位置にあります。池に面する古書院は二の間の広縁から東向きに突き出た竹すのこの月見台が設けられており、これは月の出の方角と一致して、月の出を直ちにとらえるように設定されているとのことです。夜、中空の月に目をやりながら、池（鏡）に映るもう一つの月を見る、二つの月を見るとは幻想的寓話的な情景です。



古書院と月見台

智仁親王の歌からは、桂の月に託して、武家・

徳川に権力が移り、王朝末期の悲しみをも読み取ることもできましょう。

それにしても四方の岑とは、ここから比叡のお山もよく見えていたのでしょうか。今は庭の木々が大きくなって山々は見えなくなっているのですが。

桂離宮は「月の桂」と呼ばれるほどに月をテーマにした造作・デザインが各所に取り入れられています。

### 時間と造形

桂離宮は初代智仁親王、二代智忠親王（1619年～1662年）と二代にわたって半世紀（1615年～1662年）をかけてつくられたということですが、つまり増築しつつ庭園を充実させていったことがうかがわれます。

古書院に続く中書院、新御殿は建て増し分ですが、高床式の古書院の建築スタイルを踏襲して、少しずつ後ろにずらしてそれぞれの前庭を広くとるように雁行させているのです。



五月のあやめ

建築自体として、建築の存在する外部空間として和風の「調和」が感じられます。一人の人物が力まかせに全体プランをつくるのではなく、創りながら、状況の変化に合わせて最終形にたどりつくのは賢いやり方です。部分から全

体を創り上げてゆくのです。

設計に時間をかける分だけ、誤りも少なく、良いものが出来る確率は高まります。

桂の材料は木材にしろ、石にしろ、土にしろ、十分に吟味されたちがいありません。これに職人の丁寧な仕事が重なっています。

それにしても初代古書院の簡素簡明素朴さを引き継いだ二代目の作には内に華やかさも感じられ、二代目の心情を感じます。

### パルテノンと桂離宮

桂離宮を取り上げた論文や研究は多いのですが、この中でドイツの建築家ブルーノ・タウト（1880～1938）は、昭和8（1933）年来日し、桂離宮を見て、ヨーロッパの古代建築を代表するギリシャのパルテノンに比肩する日本の古建築の代表例だと絶賛しているのです。アクロポリスの丘に立つ石造建築パルテノンと木造の建築桂離宮とは、ともにはっきりとした人間尺度の原基を読みとることが出来るというのです。パルテノンは人間の尺度（寸法と比例）をもとにあらゆる要素においてバランスがとれているといえるのですが、桂離宮においても日本人古来からの人間尺度で創り上げた木造建築であり、直裁簡明で、各要素にみごとな調和がつくり出されているのです。日本の古建築の一つの到達点を示しているといえましょう。

私もかつてアクロポリスの丘の麓に半年ほど滞在していたことがあり、タウトの説はうなづけるのです。

それにしても庭園にはお国ぶりが表れるものです。ヴェルサイユ宮殿など頑固なまでに左右対称のヨーロッパの宮殿と庭園、建築に庭を取り込むアルハンブラ宮殿の庭、がっちりとした都市一城壁にかこまれた城市の中の奇岩を配し

た中国式庭園とも異なります。

日本の庭園は自然の内に抱かれる様に、あるいは自然をそこに再現する様に造られます。この点で桂離宮は日本式庭園の原型です。庭園桂離宮の基本設計はまず桂川の水を引き大きな池（敷地の半分）を設け、この池の周りに施設群を配置したことです。これを池をめぐる回遊路でつなぎ、木々、石、草花のある庭と一体となった建築とともに眺めを楽しむ趣向です。

高低差のある敷地の中に生まれた池岸線は、入り組んで、回遊園路を散策する人々の目（線）を多様に楽しませてくれます。

書院、そして5つの茶屋一月波楼、松琴亭、賞花亭、園林堂、笑意軒はそれぞれに所を得て差別化され、独自のたたずまいとそこからの眺めをもっています。



月波楼遠景



松琴亭



園林堂遠景

### 人間尺度の小宇宙

庭園桂離宮の中心である池は、海石を敷いた洲浜から海に見立てられたと感じられます。海（池）、山（築山）を造り、空（夜空の月）を取込んで、日本の王朝の末裔はここに小宇宙をつくりだそうとしたのかと感じられました。

今や京都の街も近現代建築にうずめつくされています。月についても、月から地球を見る時代となりました。しかしこの現代京都の隅に森に包まれて息づいている桂離宮は、依然として人間尺度の小宇宙であると感じることが出来ます。そして日本文化の一原型であるとも感じた52年ぶりの桂離宮の再訪でありました。

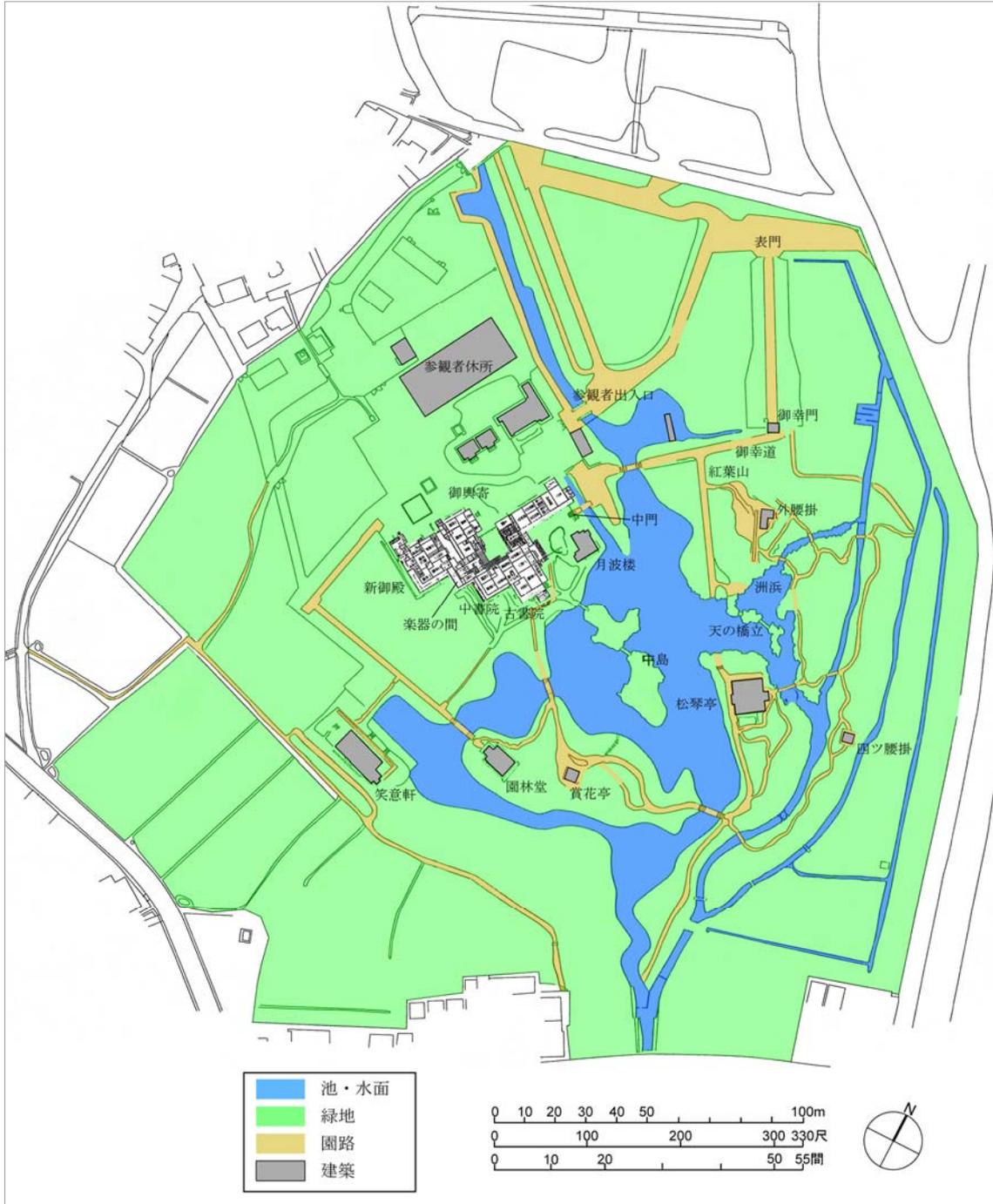
写真は同行のクラスメート高木恒雄君の撮影（5月18日）したものです

### 参考文献

1. 「桂離宮 修学院離宮」監修：前宮内庁京都事務所長・斉藤誠治、京都新聞出版センター、2004.10.31
2. 「月の桂離宮 三好和義：写真集」三好和義、小学館、2009.1.20
3. 「ニッポン」ブルーノ・タウト著、森とし郎訳、講談社学術文庫、1991年12月10日
4. 「人間尺度論」戸沼幸市、彰国社、1978.6.10

(2010.06.15)

## 桂離宮 配置図



注：本図は、筆者が「月の桂離宮 三好和義：写真集」（三好和義）の巻末にある桂離宮配置図と御殿平面図をもとに、縮尺統一して作成した合成図である。